



令和3年度海洋水産資源開発事業<いか釣り：北太平洋海域>の調査概要



調査船：第五十一日榮丸（181トン）
調査期間：令和3年7月～令和3年9月
調査海域：北太平洋海域

調査の目的

北太平洋に分布するアカイカ資源を有効に利用するため、本種を対象としたいか釣り漁業の効率的な漁場探索手法の開発をする。

本年度調査の主な成果等

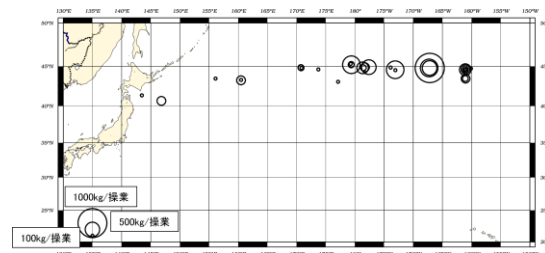
65日間の調査期間において、合計39日の操業調査を実施した。その間、北緯40度付近を東進する低気圧や台風の影響で、数日間操業を見合わせもしくは南下避航を余儀なくされた。

調査期間を通じてアカイカの漁獲は少なく、最も漁獲された場合でも1操業日で約500kgとなり、多くの操業日で100kg以下の漁獲であった。7月には漁獲された全個体が外套背長200mmを超え、雌の個体のみであったことから、秋生まれ群であった可能性が高い。

一方で、8月では漁獲された多くが外套背長300mmを超える個体である中、外套背長200mm以下の個体も漁獲され、冬春生まれ群の加入が認められた。この期間までに西経160度から日付変更線周辺まで漁場探索をしたが、アカイカの好漁場を確認するに至らなかったため、9月以降は東経海域へ漁場を変更した。西に移動すると、大型個体は釣獲されなくなり、小型個体中心の漁獲となった。漁獲されたアカイカの頭部サンプルから平衡石を採取し、日齢解析による詳細な生まれ月の分析を現在実施している。

また、中国籍のいか釣り漁船とみられる外国船の近傍10～20マイル内での操業を北緯42度、東経156度周辺で6日間（9月3日から9月8日）にわたって実施した。しかし、調査船の漁獲は最大でも30kg程度であり、採算性が確保できる漁獲ではなかった。漁獲された個体は、外套長250mm以下の小型個体であった。なお、これら個体と日本沿岸三陸沖に来遊する個体の関係を明らかにするため、平衡石中の微量元素を分析する予定である。

令和2年度の予備的な解析の結果、海洋モデル（HYCOM）で出力される中層水温構造と漁場の位置が密接に関係していることが認められた。しかし、これらは海洋モデルでのデータと漁場の関係において見えるのみで、実際にその水温構造が存在するかについての観測はまだなされていない。そこで、等水温度線が急激に立ち上がる壁構造が実際に存在しているのか、漁場にどのような影響を与えているのかについて、現場で観測を行いながら操業した。取得した水温データから鉛直断面図を作成し、HYCOMとの比較を行ったところ、アカイカの好漁場と推定される水温8度の壁構造は、海洋モデルでは北緯43度12分に確認でき、実観測では北緯44度15分に確認できた。水温8度の壁構造の形成に約緯度1度分の差異があったが、壁構造は実在していることは確認できた。なお、水温6～7度の壁構造は緯度の差異が少なかった。今後の調査ではアカイカ好漁場の指標となる壁構造の水温を把握することで、漁場探索に寄与すると考えられる。



令和3年度調査の漁獲（kg/操業）